

# 在韓被爆者健康診断の派遣医師を激励

2005年6月23日 長崎新聞掲載 以下転載

今月下旬から韓国・ソウル市で在韓被爆者の健康相談にあたる本県の医師団(団長・森秀樹長崎原爆病院副院長)の壮行式が二十二日、県庁であり、金子知事が医師らを激励した。韓国への医師派遣は国の在外被爆者支援事業の一環で、昨年七、十月に続き三回目。

壮行式には、森団長と副団長の大津留晶長崎大医学部・歯学部付属病院国際ヒバクシャ医療センター助教授ら五人が出席。金子知事は「韓国の被爆者は心待ちにしている。大変だろうが、頑張してほしい」と述べ、昨年実施した陝川、大田・平澤での相談状況を聞いていた。

森団長は「昨年は百三十人の相談を受け、日本と同様、高齢に伴う成人病などがみられた。被爆者特有の原爆による精神的な不安を今なお抱いている人も多かった」と説明。その後、知事は大韓赤十字社総裁あての親書などを森団長に託した。

医師団(内科六人、整形外科一人、理学療法士二人、保健師二人)は二十六日 七月二日、韓国・ソウル市のソウル赤十字病院で、同市と同市近郊に在住する韓国人被爆者の相談を受ける。日本の医師は国外で診療行為ができないため、事前に受けた健康診断結果を基に、それぞれの病状を聞き取り、健康指導に当たる。

県によると、健康相談を受けるのは過去最多の三百二十五人(五十九歳 九十二歳、平均年齢六十九歳)。そのうち、被爆者健康手帳を持つのは二百九十九人、長崎で被爆した人は十一人。今秋には別の都市で実施する計画。

